

アダム・スミスの修辞学および文学講義から読み取れる コミュニケーションの可能性についての一考察

吉田 杉子*

0 はじめに

アダム・スミス (Adam Smith, 1723-1790) は、通常経済学者として知られているが、『国富論』(An inquiry into the nature and causes of the wealth of Nations, 1776) が公刊されるまでは、倫理学者として知られており、スミス自身は、『道徳感情論』(The theory of Moral Sentiments, 6th ed, 1790)を『国富論』より高く評価していた¹。

スミスは1752年から道徳哲学の講義を担当し、1763年に辞職するまで道徳哲学、法学ならびに修辞学の講義を行った。道徳哲学の講義は『道徳感情論』として出版されたが、法学と修辞学は学生の筆記した講義ノートを残すのみである。

スミスの文学講義のそもそもの出発点は、1707年のスコットランドとイングランドの合邦以来、スコットランドにおいて英語を習得することが必要不可欠となったことにはじまる。特に、話し言葉としての英語の習得をめざすことがまずもとめられたが²おおよそ概念の世界を構築するにあたって「ことば」あるいは言語の組み立ての手法という問題は避けて通れない課題であり、人間が社会のなかで生活していくうえで、「ことば」によるコミュニケーションは必須である。

スミスの生きた時代は近代市民社会の成立の時期であり、「近代的人間」のスムーズなコミュニケーションは社会の活性化にとってなくてはなら

ないものである。筆者は、本稿において、スミスのことばによる表現法についてのひとつの見方をたどりながら、スミスのコミュニケーション理論について考察する。また、出版当時大きな反響を呼んだ、スミスの著書『道徳感情論』における共感 (sympathy) 理論を視野に入れ、スミスが、人間相互のコミュニケーションの可能性についてどのように考えていたかについて考察する。

1 アダム・スミスの修辞学・文学講義

『修辞学・文学講義』(Lectures on Rhetoric and Belles Lettres) は、『道徳感情論』とともに、学生の講義ノートから出発したものであるが、『道徳感情論』は公刊され、初版から第六版まで出版が重ねられている。『修辞学・文学講義』のノートは生前未刊行であった。これには1762年11月19日から1763年2月18日までの30回の講義の日付が入っており、これはスミスの大学における最後の講義の記録である。以下、部分的にはあるが、スミスの『修辞学・文学講義』をみていく。

スミスは、まずはじめに、文体には明晰さ (perspicuity) がもとめられることを述べているが、明晰な文体とは外来語を避け、可能な限り本来語 (natives)、すなわちその語に深い馴染みがあり、その語源を確認することのできる語を使うことが好ましいと述べている。スミスは、外来語の使用は、同じことを意味するにしても、本来語を使うときと同じ強さで概念を伝えることはできな

*比較日本学教育研究センター研究協力員、國學院大學兼任講師

い、と言っている。しかし、外来の単語も長い歳月を経ると市民権を得 (naturalized)、本来語の地位を占めるようになるが、その語が入ってきた時期によって、単語のもつ力強さはかわってくる。彼は、英語は、多数の他の言語の複合体であるので、極めて注意深くならなくてはならない、と述べる³。そして、かっこや余計な単語のない、表現の自然な順序もまた明晰さにとって大きな助けになる、とする。われわれが自然な書き方と呼ぶのは、このことで、これによって書き手の意味するものごとが、われわれの心に自然に伝わり、われわれはその意味を容易に汲み取ることができるようになる。このような規則を守らない作家として、スミスはシャフツペリをあげている。スミスは、シャフツペリの文体は、非常に多くを一時に提示しすぎていることを指摘している⁴。しかし、スミスは、短文は長文に比べて明晰であるとは言っていない。スミスは、短文は、文章と同じく表現をも簡潔にしようとし、脈絡のない書き方になりがちになることがある、とする。簡潔な表現とみじかく切れる文章は、事実をただものがたる歴史家たちあるいは教訓的な文体で書く人々だけに適している、とスミスは考える⁵。

第四講においては、ことばの配列についての考察が述べられているが、スミスはこれを、文体の考察であると言っている。彼は、総合文 (period) とは、一組のことばが、他の助けをえずに完全な意味をあらわすものである、とする。この文は数節、数句からなり、それ自身で完全な意味をもつ。また、ひとつの文のくみだてにおいて、最良の順序とは、話していることがらについて、話し手の心にきわめて自然に浮かび、彼の感じをもっともよく表現する順序であると言っている⁶。

第六講では、言葉のあやと文のあや (tropes and figures) について触れている。

これらことばのあやと文のあやは普通、ことばに重要な美しさと優雅さを与えていると考えられている。崇高で非凡なものを示すのはすべてこと

ばのあやだといわれているが、スミスはことばのあやの起こりについて以下のように記述する。すなわち、ひとびとは、まず言語を規制するために、文法とよばれるものを形成したが、その規則にまとめられないものに言葉のあやとか文のあやという名称をあたえた、と。クインティリアヌスとキケロなどは、あやを用いた表現において、言語の全ての美、高貴で壮大で崇高なものすべて、情熱的で感動的なものすべてが見出されるべきだという。しかし、事実はこちらと異なり、話し手の感情が、むだなく明白平明巧妙なやりかたで表現され、かれがとらえられていて共感によって (by sympathy) 相手に伝達しようとしている情念や愛着が、平明巧妙に表現されていれば、その表現は、言語があたえうるすべての力と美をもつ。あやが導入されるかどうかは問題ではない。あやは、表現の美しさになにも追加しないし、それからもとりさらない。あやはそれ自身の内在的価値をもたない⁷。

第七講で、スミスは、記述されるべきことをことばが適確および適切に表現し、書き手がそのことについて心に抱き共感によって聞き手に伝えたい (communicate by sympathy to his hearers) と思った感情を伝えている場合に、その表現は、ことばが表現に与えることのできる美のすべてをもつことになると述べ、続く第八講で、文体の多様性について次のように述べている。

感情がさまざまであるように、文体も多様なものである。書き手の性格は文体を多様にするに違いない。重々しい精神をもった人は、軽快な人とは非常に異なる仕方、対象を叙述する。しかし、われわれが尊重するなにかひとつの決まった文体があるのではなく、快適なものは多様であるのである。どんなこっけいな対象にも、少しも心を動かされないのがふつうの、極端なきむずかしさと重厚さは、驚嘆されないだろうし、もっとも些細なできごとにもわれを忘れるのがつねであるような軽快さも、そうだろう。しかし、このふたつの

性格の中間点だけに、快適なものをもとめるべきではない。陽気な人は重厚であろうと努めるべきではなく、重厚な人が陽気であろうとつとめるべきではない⁸。

著作に対してだけでなく、交際と行動にも上に述べた規則は適用可能であることをスミスは示す。すなわち、人が気持ちのいい仲間になるのは、かれの感情が自然に表現されているようにみえる場合、情念や愛着がただしく伝えられる場合、そして、相互の嗜好がたがいに適合して自然なため、われわれがそれらに同意したくなる場合、ではないだろうか、と述べている。同じように、文体における快適なものとは、全ての思考が、それらが書き手のなかに引き起こされた感情を示すように、適確かつ適切に表現されており、すべてが自然で気楽に見える場合である⁹

対象の記述のための一般規則については第13講において以下のように述べられている。

第一は、記述される諸対象の「全体」が、同一の情動をかきたてる傾向をもつこと。主な構想が陽気としたのしさをかきたてることである場合には、憂鬱なあるおそろしいことは、なんであってももちまかれてはならないし、他方でわれわれが畏怖すべき荘重な感情をたかめようとする場合には、全体がその方向にむけられなければならない。第二に、記述は短くあるべきで、長いために退屈になってはならない。しかしこの場合、この簡潔を達成しながら同時に、記述に活気と力をあたえる諸事情をもちこむことには困難がある。第三に、われわれは自分たちがとりあつかうすべての事情をひとつにまとめるべきだというだけでなく、みごとでめずらしい若干の事情をえらびだすのが適切であることもある。画家が果実をえがくのに、形と色をかくだけでなく、それをおおう和毛も表現したり、花の露はその絵にほんものとのきわだった類似性を与える。同様にして、われわれは記述にさいして、われわれがかきたてようとする一般的情動のなかで同時におこりながら、し

かもあまり注意されないいくつかのこまかい事情をえらびだすべきである。そういう事情はつねに、ひじょうに重要な効果をとまなっている¹⁰。

第十六講では、複雑な諸対象を記述するための適切なやりかたについて述べられている。そういう諸対象とは、人々の性格や人びとの比較的壮大で重要な諸行為や行動である。そこでは以下のように指摘されている。

われわれがある性格を直接的に記述するときは、われわれはそれを構成するさまざまな部分を述べ、それぞれの感情または精神的傾向がどのようにその人物のなかに混合してあるかについて述べる。このことを、かなりの程度まで完全におこなうには、卓越した手腕、深い洞察、精密で確かな観察、ひとびとについてのほとんど完全な知識が必要である。このやりかたは、例外的にうまくいかないかぎり、その性格の正しい概念をわれわれに伝えるのに十分であるということはほとんどない。性格の一般的な特徴は、それだけではわれわれが記述する性格を、おそらくそれとはたいへんちがっている他の諸性格から、区別するのに役立たない。ある性格を区別する部分を形成するのは、徳または悪徳、誠実または不正直、勇気または臆病の程度の差であるよりも、かれの性格を形成するにあたって、これらのそれぞれの部分がうけもつ色合いなのである¹¹。

人間の極めて複雑で重要な諸行為を記述する適切な方法の例として以下があげられている。

例えば、悲哀の感情は、現実においても記述においてもともに、もっとも感受作用を与える情動であるが、これらがたいへん高まった場合には、その効果の精確な記述によっても表現されえない。その効果についての適当な観念を伝達するには、どんな言葉も十分ではない。そのような場合の最良の方法は、その悲哀と心配について、どんな間接的記述もくわだてることなく、たんにその人物たちがおかれている境遇、その悲運のまえのかれらの精神状態、かれらの受難の諸原因を語ること

である¹²。

以上、スミスの文学講義についてのいくつかをみてきた。スミスは、そこにおいて当然のことながら英語という言語の特殊性に基づく記述もおおくみられるが、筆者の本稿執筆の狙いは、ことばによるコミュニケーションの可能性を探るという点にある。それゆえ、ここでは、人間と人間が言語をもちいたコミュニケーションを取り合うにあたってどのような点が重要であるとスミスが考えたかという人間観察の視点を中心に、今まで取り上げてきたスミスのいくつかの講義の中の指摘を総括し、それに考察を加える。

まず、スミスは文体の明晰さについて述べているが、その際、本来語と外来語の単語のもつ強さの相違について述べている。この視点は現代のわが国におけることばの事情について考える契機となる。現代のわが国は、確固たるルーツをもたないことばの使用が多く見られるが、そのようなことばは世代を貫いて主張する文体を構成するにはことばの表現法として弱いという側面をもつことになる。ことばによる伝達を行う場合、ことばを発する側、受け取る側双方共通の地盤の確認という作業は看過されてはならない点のひとつである。

次に、表現に美しさを与えるものはことばのあやや文のあやではなく、話し手の表現が、すっきりと (neat)、明確 (clear) でわかりやすく (plain) 巧妙 (clever) に表現されているところにこそ存在するという記述は重要である。このような表現力をもつ文体を構成するための前提条件には、自己が表現しようとする内容を克明に把握しているという状況がもとめられる。選択することばの適切さは、自己の精神の中に立てられた概念に対しての明確な認識が必須であるからである。また、自己の内面世界を言語化する段階では、注意深くことばを選択しなければならぬ。そのためには、ことばの選択肢の一定の層の厚さの確保がもとめられる。これは、ことばの枠組みを広げるという

各個人の地道な意識的作業の積み重ねからなる。表現における巧妙さも同様に、一定の鍛錬の上に築き上げられるものである。

一方、スミスは、ひとつの概念を伝える際の文体はそれがそれぞれ明確さを保ちつつ様々なかたちをとりえる、と述べる。まず、その点を認識することに注意を払うべきである。多様な表現法の中において一定の文意を適切かつ正確に汲み取るという技術的側面についてのスミスの見解はここでは述べられていないが、そのためには、人が社会の中で、多くの文体あるいは表現に触れながら、経験と観察に基づきつつそれを培っていく必要があるだろう。

複雑な諸対象を記述するための適切な方法について記述する中の、悲哀の情動についての表現方法の指摘は大変興味深い。高まった悲哀の感情そのものを表現する全てのことばは無効になるとスミスは述べる。彼は、そのような感情を伝達する際は、その感情をとりまく状況、悲運の前からの精神状態、それが引き起こされた諸原因を伝えるにとどめ、悲哀の観念の構成はその情報をもとにした各自の構算力に委ねるべきである、とした。ここに、人間の感情の奥底へのスミスの洞察がみられる。すなわち、高まった感情つまり感情の根底からゆさぶられて生じる情念は分割不可能な域に達しており、いかに考慮され洗練されて選び抜かれたことばといえども感情を適格に表現することはできないとするスミスの見解である。これは、ことばの限界を示すというよりもむしろ、経験と観察に基づく感情の極みの性質についてのスミスの分析である。つまり、感情とは静止した状態を保ちえないという性質を有するものであるのに対し、ことばを連ねる場合、それは、その文のピリオドにおいて、一つの側面として切り取られたものとなる。その時点において感情は感情の源とは遊離することになり、そこにおいて原初的感情とは異なるものとなるからである。

しかし、スミスは、ところどころで「共感に

よって」(by sympathy) という記述をもちいながら、人間相互のコミュニケーションを記述している。上において、「感情は言語化し得ない」というスミスの見解を述べたが、「共感」によっていくらかでも「感情」を分かち合うことができるのであろうか。筆者は、この点に注目し、次項において、人間のコミュニケーションの可能性についてのスミスの視点をさらに深めることにつなげる。

2 スミスの共感理論とコミュニケーション論

前項において、筆者はスミスが人間相互のコミュニケーションの媒体となることばおよびことばの組み立てである文体についてどのような見解をもっていたかについて触れた。そこでスミスがめざしたところは、社会における人間が相互に意思伝達する際のひとつの側面の提示であった。スミスの『修辞学・文学講義』には人間の共感 (sympathy) 理論について表立って取り上げている箇所はないが、すでに述べたように人間相互の意思疎通において共感概念は注目すべき点である。筆者はこの項において、『道徳感情論』にみられるスミスの共感理論にヒントをえながら、スミスのことばによるコミュニケーションの視点を考察する。

スミスの共感理論を考察するにあたり、まずはスミスの基本的人間観について述べる。スミスは、人間を以下のような存在であると規定している。

第一に、スミスは人間に共通のより強い性質として利己的本能を指摘している。スミスはこのことを消極的に捉えているのではなく、人間はまず自分自身のことを配慮するように宿命づけられていると考えている。彼は、近代市民社会の人間関係の骨格の形成は主として個人に内在する利己的感情の発動に基礎をおくものであるとし、それは利他的感情によって推進されるのではない、と考えるのである。¹³

中世の教会主義の崩壊の後の近代的人間観として、ホブズは利己的人間観を打ち出したが¹⁴、上述したスミスの人間の利己的性質は、人間をあくまで利己的存在であるとみなすホブズのそれとは異なるものである。なぜなら、スミスは、人間を孤立した存在としては捉えず、社会の中に生きる人間は、相互に関わりをもつものであるとし、人間は、自分自身を、自然のあらゆる他の部分から切り離され、孤立したある種の全体であるとはみなさない。自分が自分の世話をしていればよいとは考えない。人間が自分を観察するときには、人間の性質と世界の偉大なる精神 (the great genius of human nature, and of the world) が彼を眺めると想像される見方を採用する。彼はいわばそのような神聖なる存在の感情 (the sentiments of that divine Being) に移入し、自分自身を巨大で無限の体系の一原子ないし一分子とみなしている、としている¹⁵からである。

加えて、スミスは人間のイマジネーションの能力について一定の評価を与えており、以下のように記している。

「われわれは他人の抱く感情について直接の知識をもちえることはないが、他人の状況がどのようなものであるかを想像力 (imagination) によってかんじとることができる。想像力によって立場の交換をし、他人の身体に移入して (enter into)、ある程度までその人間と同じ人格になって、その上でその人間の感じに関する何らかの知識を得、程度は弱まるが、その人間の感じた感覚に近いある種の感覚をかんじるようになる¹⁶」。

このように、共感とは、単に素朴な感情に由来するものではなく、想像上の立場の交換を通して自分以外の立場を認知するという知的側面をもつのである。すなわち、共感とは、理性の吟味を経た後に導き出されるものであり、前提として最大限の理性の駆使がもためられる。

通常、「共感」ということばから推測されるものはその情緒的性質であろう。共感するとは感じ

とるといふ、精神あるいは心の作用であり、それは最終的に感覚作用であるといえるからである。しかし、既に述べてきたように、共感とは理性に裏打ちされたものである。共感とは「他者との共同感情¹⁷⁾」であり、人間間のコミュニケーションは、理性によることばの慎重な選択および組み立てを経、そこで作り上げられた概念の意味するところへの注意深い確認を経た後に意味を汲み取り、その後相互に感情移入（共感）して文意を汲み取るところに成立する。そして、そこで得られた感情はスミスのいう「神聖なる存在の感情」を分かちもつ状態であると筆者は予想している。つまり、ここでいう共感とは個別的に存在する人間の精神を掘り下げた位置でつながる「巨大で無限の体系」のもつ感情の共有なのであろう。

しかし、ここには大きくみて二つの問題点が見受けられる。ひとつは個々における理性の発達段階の吟味、そして、感情移入すなわち感覚作用の正当性はどのようにしてはかりえるかという問題である。その人間が理性的でありえるかについて一定の尺度を用いて示すことは極めて困難である。一人の人間が理性的であるかいは、現実の中で、社会の中で、人と対峙しながらそのことを自らに問いかけていくよりほか方法はない。第二点目である「感情移入」あるいは「共感」については、「人間はまず自分自身に配慮するという性質をもつという特性を念頭におかなくてはならない。すなわち、共感が共同感情ではなく、自己の偏った感情である可能性があることを常に顧慮すべきである。この二点を解決するためのスミスの解決策は、彼の『道徳感情論』で取り上げられている「公平なスペクテイター」への理解にもとめられる。以下、「公平なスペクテイター」について簡単に記述する。

スミスは、道徳的価値評価の基準の第一段階に「現実のスペクテイター」、第二段階に「自己の内なる理念的スペクテイター」、第三段階に「公平なスペクテイター」を置いている。第二段階は良

心（conscience）による判断であり、良心の判断は通常公明正大であるという位置づけをもつ。しかし、スミスはここで、人間が自己欺瞞に陥りやすいという性質を見逃さず、さらに上位に「公平なスペクテイター」の判断を置く。スミスはこれのことを「神人」（demigod）と呼び、人間の判断の絶対性を否定し、導き出されたひとつの結論は他者による絶え間ない検討を余儀なくされるべきであることを述べる。

以上、スミスの道徳論における道徳的価値評価の基準について述べたが、上の記述は、人間と人間における意思伝達についても概ね同様な基準がもとめられると筆者は考える。

上に述べた道徳的価値評価の方法論に鑑みてコミュニケーション論を考えた場合、そこから引き出される結論は人間は完全なるコミュニケーションをなしえないという否定的な側面ではなく、より完全に近いコミュニケーションを相互になしえるためには、常に繰り返す状況を問い直すという連続的な努力がもとめられることを示唆する。スミスの道徳論において、絶え間ない注視を行なうのは他者の眼であったが、人間相互の意思伝達におけるそれは自己の中の多角的視点と置きかえることができる。およそ一人の人間の思考の幅には限界があるが、それを受け入れながらもより多面的に検討した後にはひとつの概念を引き出し、それに対して更に絶え間ない注視の眼を向ける手堅さが人間相互のコミュニケーションにも要求されると考えられる。

3 結び

筆者はこの論文において、「ことば」あるいは「文体」、および「共感」という観点から人間相互のコミュニケーションのかたちについて述べてきた。本稿の初めにおいて述べたように、スミスの修辭学・文学講義はスコットランドとイングランドとの合邦（以下合邦と略）によって、スコット

ランドにおいて英語を習得することが必要不可欠になったことにはじまる。スミスは、合邦後間もない1723年にスコットランドに生まれ14歳でグラスゴー大学に入学するが、1740年からオックスフォード大学に転じ、その地に6年間とどまった。同時に、その時代は中世の教会主義の崩壊の後をうけて新興近代市民社会が成立しつつある時代であった。封建的身分制度から解放された人びとは価値基準をあらためて問い直す必要に迫られる。このように、スミスの眼前には二つの課題がおかれていたのである。

合邦によって英語の習得がもとめられたスコットランドの人びとであるが、英語習得の理想的環境が整うまでには一定の歳月を要することは明らかである。アダム・スミスは、7歳で郷里（エジンバラから北へ100キロほどのカコーディ）のグラマースクールに入ったが、記憶力抜群で、10歳でラテン語を学び始めたという。スミスが、オックスフォード大学に転じてからの英語習得の過程は、母国語として英語を自然に習得するというかたちではなく、常に精神的緊張をともなって英語に対していたことが予想される。そこに、スミスの表現方法を考察する意義がみとめられると思う。スミスの修辞学・文学講義には一定の評価があり、同僚のジェームス・ウドロウは「アダムスミスは、言語についての驚嘆すべき講義のひと組を（文法家としてではなく修辞家として）陳述した。単純、微妙等々のさまざまな主題に適合する文体の特徴の、さまざまな種類について、文章のさまざまな部分の構造、自然の順序、適切な配置等々について」と述べている¹⁸。

一方、時代は新興近代市民社会成立期である。社会に生きる人びとにとって、その精神的基盤すなわち社会を秩序立ったものにするに足る行為の基準の諸原理あるいは善悪の判断のそれをどこにもとめるかという課題の占める位置は大きい。新興近代市民社会における人間と人間のかかわり方についての一般原則を引き出すにあたってスミス

が採用した方法論は、現実における経験と観察に基づいてそれを導き出すという手法であった。そこから得られた人間観察の視点あるいはコミュニケーションにおける一般原則をたどることは、人間関係の希薄さが指摘されている現代社会における人間相互のコミュニケーションの方法を考えるにあたっても大きな助けとなるだろう。

最後に、外国語を学ぶことは母国語を見つめなおす契機になることを述べたい。特にひとつの表現の意味するところを外国語を通して再度表現し直すことは母国語のもつことばの意味あるいはことばのニュアンスに対してより深く考える機会を与える。また、母国語および外国語をすり合わせて一点を見つめることにより、どちらか一方の言語でしか表現し得ない領域があることに気づくことがあるかもしれない。それゆえ、実生活で外国語の使用が不要である場合でも、外国語を学ぶことは各個人の内面の世界観をより明確に、より興行きをそなえたものとして構成することにつながる。そして、そのことは自己の世界観を広げるのみならず、人間相互のコミュニケーションを深めることにもつながるのだという点を述べて結びにかえる。

註記

- 1 水田洋,「解説」p.367(水田洋・松原慶子訳『アダム・スミス 修辞学・文学講義』所収)名古屋大学出版会 2004年
- 2 前掲書 p.374に「1751年に民事控訴院(スコットランド最高裁判所)裁判官になったロード・ケイムズが、アダム・スミスの公開講義を計画した。(中略)ケイムズには法廷での英語弁論の訓練の重要性が痛感されたに違いない。」と記されており、合邦の後、スピーキングのスキルとしての英語の習得がまずもとめられた。
- 3 Adam Smith: *Lectures on Lhetoric and Belles Lettres*, edited by J.C.Bryce and A.S.Skinner, Oxford University Press, 1983. p.3
- 4 シャプツベリは通常イギリス道徳観各学派の祖であるといわれている。彼の提唱したモラルセンス(moral sense)という概念はハチスンによって体

系だてられた。スミスはグラスゴー大学におけるハチスンの直接の教え子であり、「忘れがたきハチスン博士」と呼び敬愛の情をしめしている。

- 5 *Ibid.*, pp.3-5
- 6 *Ibid.*, p.17
- 7 *Ibid.*, p.25
- 8 *Ibid.*, p.40
- 9 *Ibid.*, p.43
- 10 *Ibid.*, p.45
- 11 *Ibid.*, pp.69-70
- 12 Adam Smith: *The Theory of Moral Sentiments*, 1790 (6th edition), Edited by D.D.Raphael and A.C.Macfie, Liberty Press Indianapolis, 1982、以下TMSと略
- 13 TMS, *Ibid.*, p.9
- 14 ホッブズ (Thomas Hobbes, 1588-1679) は、人間の本来の性質を強固な自己保存 (self-preservation) の欲望をもつものであると規定し、主権の絶対性を説いた。
- 15 TMS, *Ibid.*, p.276
- 16 TMS, *Ibid.*, p.9
- 17 濱田義文, 「イギリス市民社会の倫理」(『イギリス道徳哲学の諸問題と展開』所収) 日本倫理学会編, 慶応通信 1991年 p.206
- 18 水田洋, 前掲書 p.368